



「それでエックスはどこにいる？」

応援を要請されて現場に行ってみると、辺りは騒然としていて、瓦礫から立ち上る煙が事の激しさを物語っていた。

「こっちだよ！」

先に来ていたアクセルが手招きしているのが見える。

近づくと、エックスとアクセルが瓦礫の上に座っていた。

「話しかけても何も反応しないんだ……」

アクセルがエックスを見る。

エックスは頭を両手で抱え、うずくまるようにして震えている。

エックスに視線を合わせるように、片ひざをつく。

「エックス、大丈夫か？」

目の焦点が定まらず、ただうわ言のように「人が、人が……」と繰り返している。

「ライフセイバーが言うには、イレギュラーが放つ強い幻惑作用のガスを吸い込んだためだろうって」

アクセルが事の次第を話す。

エックスはイレギュラー発生の通報を受けたのは午前中。イレギュラーは医療機関で働いていたスカンクという名のレプリロイドだった。奴は建物に人質とともに立てこもったという。そこで交渉した末、エックスと人質を交換するという前代未聞の取引が執り行われた。エックスに対して、恨みを持つ者かあるいは他の意図があるのかは定かではない。人質が救われるのなら、とエックスも了承したらしい。しかし、エックスが建物に近づいた瞬間、信じられないことが起こった。なんとイレギュラーは、人質もろともエックスに向かって強い幻惑作用のあるガスを噴出したというのだ。人質の中には多くの人間がいた。人々は、幻惑作用で我をなくし暴れ始めた。その後イレギュラーは建物を爆破し、逃走。このガス管の並ぶ工場に逃げ込んだということらしい。アクセルは救助のため呼ばれたとのこと。エックスを見つけた時点では、すでにこの有様で、とても戦えるような状態ではなかったのだという。

アクセルが話している間もずっとエックスの様子を見ていたが、こちらに気づいたという素振りはない。

そこでエックスの肩にそっと触れてみた。するとエックスは大きくビクッと体を震わせた。そして手を振り払うように体を仰け反らせたかと思うと叫んだ。

「うわああ！」

驚いてエックスを見ると、自分を両手で強く抱いてこちらの方を焦点の定まらない目で見ている。大きく呼吸するように口を開け閉めしているが、うまく呼吸できていないのだろう、顔が青ざめ震える。

そんなエックスをなだめ、目を見て語りかける。

「エックス、エックス。俺だ。わかるか？ゼロだ」

エックスはただ怯え、離れようとする。そんなエックスに何度も呼びかける。しばらくしてようやくエックスが俺と目線を合わせる。

「…ぜ、ロ？」

俺だとわかると、急に泣きそうな顔になって訴えだした。

「あ…ゼロ、ひ、人が…人が…」

「落ち着け」

「人が、目の前で…」

「落ち着け！何があったか順を追って話してみろ」

エックスの目を見て、静かに語りかけた。エックスが恐る恐る話し始める。

エックスが気づいた時には、真っ白な空間に一人立っていた。周囲を見回すと、一軒の木造の家が建っていた。近づいていくと、そこには漢字で駄菓子屋と書かれた看板が立っていて、家の奥に一人の老婆がいた。店の土間に足を踏み入れる。すると、老婆の方から声が聞こえ始めた。

「…“アカガミ” がきたら “シュッペイ” せないかん。息子はもう帰ってはこん。この戦争で帰らぬ者は多い。日本ももう終わりじゃ」

外でブーンという音が聞こえた。外に出てみると、はるか高い空を飛行機が二機飛び去るのが見えた。

声と言っていたのを思い出す。

「戦争…」

後ろを振り返ると、そこには駄菓子屋が崩れていた。あの老婆の姿はない。下敷きになってしまったのだろうか。

「な…！」

慌てて駆け寄るが、なす術がない。

その時、叫び声が聞こえた。その方向に顔を向けると、大勢の人間がどこからともなく現れ、こちらに向かって走ってくる。皆一様に後方を恐れ、恐怖で引きつった顔で逃げ惑う。いつの間にか辺りは炎に包まれ、黒煙が夜のように太陽の光を遮り、空を覆う。炎で道はふさがれ、人々は橋を目指す。橋はすでに人であふれかえり、圧迫されて苦悶の表

情でぐったりしている。大混乱の最中、暑さと苦しさから開放されようと川に飛び込む者も多い。橋を渡らずに川に直接飛び込む者もいる。しかし、川は深く、溺れる者や人に押されて下敷きになる者などが大勢いた。まさにその光景は地獄絵図だった。

エックスはその光景を呆然と見ていた。自分だけが橋を渡りきった場所にいることに気づいて、人々に手を伸ばす。

「大丈夫ですか!？」

橋にいる者も川にいる者も一斉にエックスに振り向いた。そして我先にと手を伸ばす。

「助けて！」

「俺が先だ！」

「いや、私が先よ！」

「助けてくれー！」

伸ばされた手が足や体にしがみつく。その中には、火傷で焼け爛れた手や骨だけの手、血まみれの手や幼い子供の黒くすすけた手が川に引きずり込もうとする。

「うっ」

思わず手を引っ込めた。いつの間にかどす黒い赤に変色した川に、引きずりこまれそうになる。その手や川から逃れようと、後ろを振り返るが、後ろからも大勢の手がせまる。

その時声がした。

「おまえが“救い”をかかげるなどと笑わせるな。おまえがいくらがんばったところで何も変わらない。おまえのような奴に何ができる。おまえたちにできることは戦争をすることのみよ」

その声に呼応するように、周囲から叫び声が聞こえ始める。

助けて助けて助けて助けて助けてたすけてたすけてたすけて嘘つき嘘つき嘘つき嘘つきうそつきうそつきうそつきおまえなど消えてなくなれ！

「うわあ！」

耳をふさいでも聞こえてくる。

そんなことはない。俺にだってできることは……

果たして“ある”と言えるのだろうか。そこまで考えて気づく。今まで止められなかった戦争や混乱。一見平和そうに見えた世界も内乱などで荒れていたこと。過去のできごとがまざまざとよみがえる。

再び声が言う。

「おまえなどいない方がよかったのだ」

その時、自分の中で何かが音を立てて割れた。

「違う…」

「おまえなど生まれなければよかったのだ」

「違う！！」

頭を抱えて叫んだ。

違うと叫んでみたものの、それもただの虚勢だと心の底で思った。

何が違う？今まで俺は何もできなかったじゃないか。ただ平和を望み行動しても、結果的にすべて暴力で制してきたじゃないか。そんなこと誰が望む？

「ここにいる皆はおまえのような嘘つきを、怒り恨み憎む。何が平和だ。何が救いだ。本当は戦争がしたくてたまらなかつたのだろう？」

エックスは地面を見つめている。

「大丈夫か？」

エックスは下を向いたまま、小さな声で俺に問う。

「俺は…何のために生まれたんだろう」

「え？」

アクセルが驚きを隠せずに聞き返す。

「おまえは戦いだけでは解決はしないと信じてここまでやってきたんだろう？おまえは人間だけでなく俺たちレプリロイドにも手を差し伸べてきただろう？俺たちはそんなおまえを信じているし、誰もおまえを憎んだりなんかしない」

エックスは下を向いたまま、動かない。

「アクセル、こいつを頼む」

そう言うと立ち上がって歩き出した。

「どこ行くの？」

背中に声がかかる。

「決まっている。スカンクを探しに行く」

アクセルが静かに言う。

「怒る気持ちはわかるけど、仕事に私情をはさむなんて珍しいね」

確かにそうかもしれない。今までどんな仕事も淡々とこなしてきたが、今回はそうはいかない。悩んでばかりではいたがそれでも前向きにいたあいつを、あんな風に思わせてしまう程叩き潰したスカンクが許せなかった。

周囲でも、強い幻惑作用のあるガスを人間にも吹きかけたスカンクは危険視され、即刻処分の命令が下された。

仲間とは行動せず、一人でガス管の並ぶ細い道を走っていた。物陰に注意しながら少しずつ進む。道は曲がりくねっていて、まるで迷路のようだ。それでもなんとか奥へと進み、小さな広場に出た。

注意深く辺りに気を配りながら、一歩ずつ前が出る。その時、何かの音が聞こえ始めた。

シュウウウウ…

前方に目を向けると行き止まりになっており、誰かが倒れている。

あれは、まさか…

「アクセル？」

近づいて呼びかけても反応はない。体に触れようとした瞬間、アクセルの手が不自然に曲がり、持っていたバレットが向けられる。反射で避けたものの、そのまま発砲されてガス管に当たる。

——しまった！

爆発する。そう思ったが、何も起こらない。

そこで気づいた。さっきから音とともにつんとしたガスの臭いがこの空間に満ちていた。一人で行くといったら、アクセルが防毒マスクを貸してくれた。そのマスクをすばやく着用する。しばらくすると、倒れていたアクセルは霞のよ

うにゆらゆらと消えた。

近くにいるかもしれない。

いつの間にか音は消え、行き止まりだった場所には道が続いていた。その道を早足で進んでいくと、広い空間に出た。周囲は巨大な銀色のガス管が並び、はるか彼方に空が見える。

ここはどこかにいる。そう直感した。

慎重に前を進む。

「まさかあんたが来るとはなあ」

突然、背後から声がして振り返ると、探していたイレギュラーが立っていた。

「俺はスカンクって呼ばれてる。あんたが来るなんて、俺も昇進したもんだな」

そうスカンクは自己紹介する。

「ところでエックスの容態はどうか？」

ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべながら、俺の周囲を歩く。

「きっと幻に取り込まれちゃっただろうなあ。かわいそうに」

わざと悲しそうな顔をして同情する。

「おまえの質問に答える義務はない。即刻この場で処分する」

スカンクはおどけてみせる。

「おやおや、そんな怖い顔して…あんたはいつもそうだ。そうやって俺たちをさげすんだ目で見ても何も感じてませんって顔で処分していくんだ」

そう言って、ひっひっひっと引きつった笑い声をあげる。

「あいつもそうだ。戦いは悪だと信じていたから、それを利用して壊してやったんだ」

心底おかしように腹を抱える。

「そしたらあの表情だ」

「言いたいことはそれだけか」

思わずどすのきいた声が出た。自分が思っている以上に、腹を立てているのかもしれない。

同じく驚いたように目を丸くしたスカンクと目が合う。

「驚いたな。あんたでもそんな腹を立てることもあるのか。いやエックス絡みだからかな？」

またひっひっひっと笑う。

「こりゃあいい。仲間を悪く言う奴は許せないってか？」

聞き終わらないうちに、素早く体が動く。

ダッシュでスカンクとの距離を一気につめる。セイバーを縦に振る。

スカンクはそれを後ろに下がることで避け、背中のポンプからガスをぶちまける。すると、スーッと音もなく姿を消した。

「!？」

どこからともなく声がある。

「ひっひっひっ、驚いたか！このガスは特別でなァ、空気に触れると鏡のように光を反射させてガスの中にいる俺が見えなくなるという寸法よ！」

気配を感じて、前に跳躍する。

ブンと風を切る音が背後でした。

さらに近づいてくるような気配とガス独特のピリツとした刺激を敏感に感じとり、そこに拳を叩きつけた。

「ぐわっ」

声とともにゆらゆらとスカンクが姿を現した。

「勘のいい野郎だ」

肩をかばいながら後ずさる。

そして片腕を巨大なガスバーナーに変化させ、こちらに向ける。

「火気厳禁とか言ってられねえだろ」

ガスバーナーもとい火炎放射器から青い炎が発せられ、周囲の地面を焼き尽くす。

ガス管に触れさせるわけにはいかない。横へ走ってスカンクの間を探す。スカンクはガスバーナーの反動を抑えるためにもう片方の手で腕を押さえている。炎の勢いが強すぎて俺を狙うスピードがわずかに遅い。そこでスカンクの後ろに向かって大きく跳躍する。咄嗟の俺の動きにスカンクはついてこれない。がら空きの背中にセイバーで横にないだ。



「ぎゃあ」

叫びながら、抑えていた腕を振って俺の頬をうつ。バキッと嫌な音がして防毒マスクが壊れ、吹っ飛んだ。セイバーでその腕を切り落とし、背中から胸の辺りに力いっぱいセイバーで突いた。

「ぐあっ」

刺し貫かれた胸を押さえ、後ろにいる俺に寄りかかる。粘着性のある赤い液体が地面や俺にかかる。周囲が赤く染まっていく。

息も絶え絶えになっているスカンクはふいに笑い声をあげた。

「ひっひっひっ、俺が死んでも、あんたにはただおしゃべりな奴だったなぐらいにしか思わないだろうな」

言いながら、セイバーを掴む。

「そんなこと思わせねえ。もっと俺に恐怖している表情を見せてくれよ…」

おもむろに片腕を頭上にあげる。嫌な予感がして、離れようとするがセイバーを掴まれていて抜けない。

「おまえもエックスのようにしてやる！」

瞬間、腕からガスが出る音とともに強い臭気のある空気が辺りに満ちた。

スカンクは笑みを浮かべた顔のまま倒れ、動かなくなった。

「くそっ」

マスクは壊れ、使い物にならない。手で口と鼻を押さえ、広場を離れる。しかし、目に映るものはすべて二重にも三重にも見える。頭が割れるように痛い。激しい吐き気で口を大きく開けて下を向く。ガス管に手をつけて、体を支える。二、三度咳き込んで前方を見るが、もうほとんど視界は暗闇で見えない。とうとう体を支えきれなくなってひざをつけて倒れこんだ。

真っ白な空間に一人で立っていた。ここはエックスが言っていた世界だと気づいた。世界、つまり幻の世界のことだ。辺りを見回すと、遠くに何かあることに気づく。そこに向かって歩き出した。

それは、うずくまってひざを抱えている一人の人間の少年だった。少年は何かに怯えているように顔を引きつらせ、ただ濁った目で何かを見ていた。その視線を追って振り向くと、緑色の迷彩服を着た一人の人間の男性が縄を引きずって歩いてくる。少年に近づくと、縄を両手で持つ。少年は首を振って何かを拒否する。しかし大人はそんな少年にはおかまいなしに首に縄をくくりつける。そして引きずるようにして、また歩き出した。少年は引きずられるようにして、大人についていくしかなかった。二人の行く先を見ると、そこは何かの施設があり、そこに大勢の子供たちが銃剣やサーベルを持たされている。

少年兵だ。直感的にそう思った瞬間、廃墟が建ち並ぶ荒野に立っていた。先ほどの少年兵が銃剣を持ち、敵地へと走っていく。しかし地雷が埋め込まれているのか、先頭を走っていく少年の足元から爆発が起こり吹き飛ばされていく。そんな情景を目の当たりにしながら少年たちは、何かを叫びながら走り続ける。敵の大人たちが銃を乱射し、次々と少年たちは地面に倒れこむ。地面が赤く染まっていく。

そんな光景を見ていられなくて、目を背けた。すると、一人の少年が銃剣を掲げ、こちらに叫びながら向かって走ってきた。自分以外誰もいない。狙われているのは俺だ。銃剣をかわして、横に飛びすぎる。少年は向きをかえ、直も向かってくる。そこで銃剣の柄を持って、奪い捨てた。これ以上無残な死は見たくない。しかしそんな思いとは裏腹に、少年は手榴弾のピンを引き抜いて特攻してきた。その時、少年兵に選択肢は与えられていないのだと悟った。戦場に出たら、生きて帰ることはできないのだ。爆発寸前、後ろにダッシュで回避した。少年のいた跡には、何も残らなかった。

これは昔人間たちが繰り広げた戦争なのだと思う。

狂ってる。

死にまで追いやって、これ以上何を得ようと言うのか。

「それをおまえが言うのか」

突然、声が降ってきた。

「かつて仲間を殺し、その手を朱色に染めてきたはずだ」

この声聞き覚えがある。

真っ白な地面から、黒い塊のような粘着性のある水が溢れ出す。それは人の形を作り、立ち上がる。それが何体も何体もわき上がる。一番近くにいる人形が自分とそっくりな形となる。そいつが真っ赤な口を三日月型にひん曲げる。

「俺はおまえの影。おまえのことなら何でも知っている」

この声、俺だ。

「おまえは孤独だ」

「何？」

「寂しい、苦しい、認められたい、愛されたい、貪欲なその心が丸見えだぞ」

俺は霜が降りるように、心が冷たくなっていくのがわかった。

「バカな…そんなこと考えたことはない」

人形は笑う。

「それは仲間に対してか？それともエックスに対してか？」

エックス。その名を聞いて、さらに心が冷たくなる。俺はエックスに対してそんな風に思ったことはない、と言えるだろうか。

「おまえはエックスに認められたいのだ」

エックスのことを考える。いつもなんだかんだと悩み、失敗を恐れ、それでも毎日を一生懸命に働く姿が目に見えかぶ。未来は明るいと思って止まないあいつだからこそ、俺はあいつを信頼し、助けてきた。それなのに、今回の事件でエックスの今までの苦労を水の泡にされたように感じていた。

「認められたいだと？」

俺は笑いを嘔み殺す。

「それはおまえの方なんじゃないのか？」

「何？」

人形の口がへの字に曲がる。

「俺の影だと言ったな。影、すなわち俺の負の感情といったところか。おまえはおまえの存在を俺に認めて欲しいからそういうことを言うんじゃないのか？」

心が凍りついてしまいそうだと思った。この冷たさは一体なんだろうか。

「もとより俺は、おまえの存在を自覚している。今更出てきて、おまえにとやかく言われる筋合いはない」

人形が泡立つ。

「どうやらおまえは落とせそうにないようだな」

突然、まばゆい光が辺りを照らす。腕で顔をかばうが、目を開けていられない。

しばらくして誰かに呼ばれたような気がした。何度も何度も呼んでいる。薄くと目を開くと、

「ゼロ、大丈夫？」

エックスが俺の顔を覗き込んでいた。俺はベッドに寝かされていることに気づく。周囲を見回すと、白いシーツに白いベッド、白いカーテンと窓…ここは病院？

「ガス管の通路に倒れているところを運び込まれたんだよ。覚えてる？」

エックスが心配そうに俺を見つめる。俺は起き上がりざま、幻の世界を思い出そうとしていた。

「どうしたの？具合悪い？」

「いや…おまえの方こそ、もう大丈夫なのか？」

エックスは気恥ずかしそうに笑む。

「うん。幻だったってことを、思い出して、ね」

「…そうか」

何か違和感を感じた。幻だったからといって、あれだけのショックを受けたのだ。まだ心に何らかの支障はあるはずだ。それなのに…

「それよりゼロ。俺、思ったんだけど、これからは一人で行動しないで、俺も連れてってほしいんだ」

そう言って笑う。

「今回みたいに、また君が倒れているところなんて見たくないから…」

寂しそうな顔をして、俺の手をとる。

「それに君が見ているものを俺にも見せてほしいんだ」

俺の目を食い入るように見つめる。

「君が普段どんな風に考えて、どんな風に行動しているのか、詳しく知りたいんだ」

エックスの威圧的な目や言葉が、俺の目を覚まさせる。エックスの手が俺の顔に伸びる。

「君が普段どんな風に——」

俺は素早くセイバーを引き抜いて、エックスの腹の辺りを刺し貫いた。

「かはっ」

エックスは、顔を歪ませて俺を睨んだ。

「おまえはエックスではない」

「なぜ…」

「あいつはそんな風に笑わない」

エックスは心を痛めた直後に、笑うことができるほど器用な奴ではない。例えそれが幻だったとしても。それは俺がよく知っている。

エックスは突然真っ黒になったかと思うと、スカンクに姿を変えた。そして周囲の景色がゆらゆらとガス管の通路へと形を変えていく。

セイバーを持つ手に力を込め、スカンクごとセイバーを押し上げる。スカンクが苦悶の表情でうめき声をあげた。

「おまえがエックスの想いをひねり潰したせいで、エックスが立ち直れない。どうしてくれる？」

セイバーを抜き、首に手をかけ、そのまま持ち上げる。そして徐々に手に力を込めながら、静かに言い放つ。

「おまえなどいなければよかったんだ」

スカンクは口で何かを言ったようだが、聞き取る間もなく、絶命した。

持ち上げた状態のまま、手を放し、手のひらを見つめた。心が割れてしまいそうなほど、冷たく、痛い。俺は今何と言った？

そのまま仰向けに倒れた。ガス管の隙間から青い空が見える。その空が、だんだんと白く濁っていく。視界が真っ白になると同時に意識が途絶えた。

遠くの方から声が聞こえた。声はだんだんと近づいてくる。

「……、……」

今何と言った？

目を開こうとしたが、思うようにいかない。それどころかまぶたが鉛のように重い。

それでも目を開けなくてはならないような気がして、薄く目を開く。

「…エックス？」

エックスが横に座っていた。

「気がついた？」

「ここは…」

はっきりと思い出せない。ここは、どこだ？

「まだ帰れないんだ。ごめんね」

そうだ。ガス管の並ぶ工場だ。俺はストレッチャーに寝かされていた。反対隣にはアクセルがストレッチャーにもたれて、居眠りをしている。

先ほどの幻の世界のこともあり、ここは現実かと疑った。

「エックス…ちょっと」

エックスの顔に手をのぼす。異常に腕が重い感覚に驚きながらも、やっとのことでエックスの頬をとらえ、つねった。

「ちょ！いははは…！」

うん。現実らしい。

手を放すと、エックスは頬をさする。

「ひどいよ、ゼロ」

「まだ幻なんじゃないかと思ってな」

「自分の頬でやりなよ」

目に涙を浮かべて訴えるエックスを見ていると、凍っていた心が再び暖かくなるのを感じた。

ふと思う。エックスは幻から立ち直れたのだろうか。

「おまえこそ、もう大丈夫なのか？」

「俺は…」

エックスが遠くを見つめる。

「俺、思ったんだ。幻の世界で言っていたあの声は、自分だったんじゃないかって。俺の弱い心が見せた真実だったんじゃないかなって。俺は心のどこかで信じていたものを信じてなくて、それをあの世界でさらけ出されて、今更になっ  
て怖くなったのかも。それに怒りや恨みや憎しみとか、負の感情なんて、みんなが持つてるものだし、それが原因で自分  
が嫌いな人は大勢いるけど、それはたぶん何か理由があって、悲しいだけなんじゃないかな。俺は、そんな人たちも  
できれば救いたい。救いとか平和とか、今回すごく考えさせられたけど、俺にはその道しかないと思った。何のために  
生まれたとか、そんなの誰もわからないけど、何かしら意味があると思う。例えそれが敵だろうと味方だろうと関係な  
いんだ。それで、その、君の疲れた顔を見て思ったんだけど、うまく言えないんだけど…、一人で抱え込まないで、何  
かあったら相談してよ」

弱い心が見せた真実、か。俺は思ったより、あの幻に翻弄されていたのかもしれない。冷たい心の正体は悲しみだったのだろうか。よくわからない。

おそらくエックスは、そんな俺を心配してくれているのだろう。

空はもう日が傾いていて、オレンジ色に染まっている。西日がまぶしくて、目をつむって片腕で顔を覆う。

「そうか」

安心したら、眠くなってきた。

エックスは強いと思った。一時は崩れそうになった心を持ち直し、そんな風に考え、自分の願望をより強固なものとして立ち直ったのだから。

そういえば一つ気になることがあった。身体的にも精神的にも重い口を開いた。

「俺…奴に、スカンクに“おまえなどいなければよかった”って言ったんだ。それがなんだか気になって忘れられない」

視線を感じて重いまぶたを少し開く。エックスが俺を見ていた。

「後悔してるの？」

後悔。そう言われると、そうなのかもしれないと思った。スカンクもイレギュラーになる前は周囲から必要とされる奴だっただろう。それを俺は存在自体を否定した。奴はどんな気分だっただろうか。奴がいない今、それはもうわからない。

エックスはそれ以上何も言わなかった。

俺は目をつむって、今回の事件のことを思い出していた。エックスは今回の事件をどう見ただろう。俺にとっては嫌なできごとだった。冷たくなった心の正体もわからないまま。だけど、エックスに会った時、正直ほっとして、凍っていた心も溶け出した。ずっと緊張していたのだろう。エックスには助けられてばかりだ。俺もまだまだ…だ、な…

「ゼロ。ゼロ？寝ちゃったのか…」

エックスは夕日を見つめる。

「お疲れ様」

小声で言ったその言葉は、俺には届かなかった。

おわり